

2022年 11月 20日(日) 関東学院教会 主日礼拝 説教要約

説教「希望のない中で望みを抱く」 ローマの信徒への手紙 4章1-25節 森田信義

アブラハムの模範

4 1では、肉によるわたしたちの先祖アブラハムは何を得たと言うべきでしょうか。2もし、彼が行いによって義とされたのであれば、誇ってもよいが、神の前ではそれはできません。3聖書には何と書いてありますか。「アブラハムは神を信じた。それが、彼の義と認められた」とあります。4ところで、働く者に対する報酬は恵みではなく、当然支払われるべきものと見なされています。5しかし、不信心な者を義とされる方を信じる人は、働きがなくても、その信仰が義と認められます。6同じようにダビデも、行いによらずに神から義と認められた人の幸いを、次のようにたたえています。

7「不法が赦され、罪を覆い隠された人々は、

幸いである。

8主から罪があると見なされない人は、

幸いである。」

9では、この幸いは、割礼を受けた者だけに与えられるのですか。それとも、割礼のない者にも及びますか。わたしたちは言います。「アブラハムの信仰が義と認められた」のです。10どのようにしてそう認められたのでしょうか。割礼を受けてからですか。それとも、割礼を受ける前ですか。割礼を受けてからではなく、割礼を受ける前のことです。11アブラハムは、割礼を受ける前に信仰によって義とされた証しとして、割礼の印を受けたのです。こうして彼は、割礼のないままに信じるすべての人の父となり、彼らも義と認められました。12更にまた、彼は割礼を受けた者の父、すなわち、単に割礼を受けているだけでなく、わたしたちの父アブラハムが割礼以前に持っていた信仰の模範に従う人々の父ともなったのです。

信仰によって実現される約束

13神はアブラハムやその子孫に世界を受け継がせることを約束されたが、その約束は、律法に基づいてではなく、信仰による義に基づいてなされたのです。14律法に頼る者が世界を受け継ぐのであれば、信仰はもはや無意味であり、約束は廃止されたこととなります。15実に、律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違犯もありません。16従って、信仰によってこそ世界を受け継ぐ者となるのです。恵みによって、アブラハムのすべての子孫、つまり、単に律法に頼る者だけでなく、彼の信仰に従うものも、確実に約束にあずかれるのです。彼はわたしたちすべての父です。17「わたしはあなたを多くの民の父と定めた」と書いてあるとおりです。死者に命を与え、存在していないものを呼び出して存在させる神を、アブラハムは信じ、その御前でわたしたちの父となったのです。18彼は希望するすべもなかったときに、なおも望みを抱いて、信じ、「あなたの子孫はこのようになる」と言われていたとおりに、多くの民の父となりました。19そのころ彼は、およそ百歳になっていて、既に自分の体が衰えており、そして妻サラの体も子を宿せないとい知りながらも、その信仰が弱まりはしませんでした。20彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました。21神は約束したことを実現させる力も、お持ちの方だと、確信していたのです。22だからまた、それが彼の義と認められたわけです。23しかし、「それが彼の義と認められた」という言葉は、アブラハムのためだけに記されているのではなく、24わたしたちのためにも記されているのです。わたしたちの主イエスを死者の中から復活させた方を信じれば、わたしたちも義と認められます。25イエスは、わたしたちの罪のために死に渡され、わたしたちが義とされるために復活させられたのです。

ローマの信徒への手紙は、その中にユダヤ人キリスト教徒もいる、パウロがまだ行ったことのないローマの教会のキリスト教徒たちに、「パウロの信じる福音」を伝えた手紙であります。本日の4章では、割礼が無くてもユダヤ人である、と言っており、前回の3章を含めて、パウロの信じる福音の中心である「信仰義認」を説いています。ユダヤ人をユダヤ人としているアイデンティティは、印としての割礼と、規律としての律法であります。しかしパウロはここで、イスラエル民族の父であるアブラハムから思考を巡らせて、本当の意味での割礼と律法を論じて、神が繁栄を約束されたユダ民族の子孫であるユダヤ人を、個別民族の範囲にとどめるのではなく、人類全体に拡大・普遍化させたのであります。説教では、4章の各節を「新共同訳聖書」を中心にし、「聖書協会共同訳聖書」や「口語訳聖書」、その他を参考にして読み解きます。

その上で、パウロは、どのようにしてこのパウロの福音・信仰義認の福音の認識に達したのでしょうか。聖書の言葉から考えてみたいと思います。パウロは、使徒言行録22章3,4節に「わたしは、キリキヤ州のタルソス(この町は学問の町でパウロに物事を哲学的に考える素養を与えたと考えられます)で生まれたユダヤ人です。そして、この都(エルサレム)で育ち、ガマニエル(当代一の律法学者)のもとで先祖の律法について厳しい教育を受け、こんにちの皆さんと同じように熱心に神に仕えていました。わたしはこの道を迫害し、男女を問わず縛り上げて獄に投じ、殺すことさえしたのです。」とありますように、パウロは、知識も熱量も十分にある熱心なユダヤ教徒でありました。ですから、神の子と称して神を冒瀆したが故に十字架の刑にかけられて死んだイエスが復活したと吹聴する、ユダヤ教にとっては邪教とも言えるイエス・キリストを信じる信徒を捕えては迫害していました。しかし、何事も深く考えるパウロにとって、何かが違うと感じるところがあったのではないかと考えます。ヨハネによる福音書20章19節に「週の初めの日の夕方、弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけていた。」とありますように、イエスとの連座による逮捕を恐れて家に鍵をかけて閉じこもっていた頼りない弟子たちが、180度変わって、自らの命も惜しまず、イエスが神の子だと、宣伝伝え続けている。

その変化の境にあるのは、ペトロの説教に表わされるイエスの復活と昇天に伴う聖霊の降臨であります。ペトロの説教の詳細は使徒言行録2章14-41節に記載されていますが、ここでペトロは聖霊に導かれて、「イエスは神から遣わされた方で、神はイエスを死から復活させられた。私たちはその証人です。そして神はイエスを主とし、メシア・救い主とされた。悔い改めてバプテスマを受け、罪を赦していただきなさい。そうすれば、賜物として聖霊を受けます。」と言っています。生前のイエスに会ったことのないパウロは、それでも、断片的にイエスについての話は耳にし、180度生き方を変えた弟子たちを見て、イエスの復活に関し何かがあったのだらうとは感じたが、彼のユダヤ教に関する深い知識と熱量は、それを打ち消していたことでしょう。

しかしパウロには、自分が直接関係したステファノの殉教の姿も心に強く残っていました。その状況は、使徒言行録7章57節-8章1節に記載されています。パウロ自身が直接係わったステファノの殉教の姿。そして何よりも、パウロは、イエスの声を聞いたのです。一度も直接、会ったことはないが、イエスを信じる者を迫害する旅の途中での衝撃的な状況の中で、その声を聞きました。使徒言行録9章1-19節に詳細が記載されています。

ペトロの説教からは、復活のイエスに会った体験と聖霊の降臨という上からの導きによって、イエスこそ神の子でありメシアであり、悔い改めてバプテスマを受ければ、罪が赦されることは言っていますが、まだどちらかと言うと、苦難の僕としてのメシアではなく王としてのメシアの認識と、バプテスマのヨハネの延長にある悔い改めと罪の赦しの感があるように私には思えます。パウロは、個人的ではありますが、直接イエスの声を聞きました。「サウル、サウル、なぜ、わたしを迫害するのか」。実際に、イエスの声を聞き、それもパウロからの迫害に対するイエスの声であり、しかも、声を聞いた瞬間から目が見えなくなり、それがイエスの言葉に従う行動によって見えるようになったという個人的な大きな実体験。パウロは、ユダヤ教に抗するように出てきたイエスという男の生き様と教え、ユダヤ人のアイデンティティである印としての割礼と規律としての律法について、自らに与えられている哲学的な思考力と聖霊からの啓示によって深く考えたのではないのでしょうか。熱心であればあるほど真の義を迫害するという人間の矛盾と罪深さ。そしてユダヤ民族の歴史をさかのぼり、アブラハムの信仰に対する神の義認とアブラハムにおける割礼の問題にさかのぼって、ローマ書4章に記載された認識になったのではないのでしょうか。この4章で述べられている考え方は、ユダヤ教徒を敵にまわし、また古代エルサレム教会の指導者の一部に残るユダヤ教的体質を引きずる指導層の一部と対立することになりますが、それでも恐れることなく、パウロは、律法を表面的に守ることに義も信仰もなく、人間の本質はもっと深い心にあり、イエスの弟子たちやステファノのように、その人間の命までもいとわない、全身が躍動する新しい信仰の認識に達したのではないかと考えます。そして、イエス自身が全生涯を賭け、その命を代償にして伝えたことを、受け手の一人としてパウロが、当時のユダヤ人の人間的な知識や習慣にとらわれることなく、新しく人間の命を呼び醒ます生き生きとした信仰の認識として、パウロに与えられた福音として伝えたものと考えます。信仰とは、深い心の問題であり、解放と希望と喜びのあるものです。それは、神のわたしたちに対する愛による契約と、その契約を心から信じるところから来るものです。そしてそれは、この世の希望の無い状況の中でも、希望を生み出すものであります。パウロは、ユダヤ教に染まってきたであろうユダヤ人キリスト教徒や異邦の地ローマで育った人々に、神の契約に基づく希望のあるパウロの理解する福音を伝えています。